

BOOK

## ナゾの国 おどろきの国 でも気になる国日本

周藤 由紀子訳 日本橋報社刊 定価:本体2,400円+税



日中国交正常化から45年が経過した。しかし、いまだに日中間で歴史認識を巡る隔たりや、現実的な利害の対立があり、政治、外交関係に不安定さをもたらし、また国民感情にぶれを生じさせている。こうした状況に、日中友好は「時代遅れ」と否定的な意見もあるが、日中友好とは、突き詰めれば両国国民がコミュニケーションや交流を通じて相手を理解し、信頼を築いていくこと、そして、その基礎の上に双方が互いに利益を得ることである。そこで重要になってくるのが「相互理解」と「信頼」である。そのために最も有効なのが、実際に現状を見てもらうことだ。

本書は、笹川平和財団の地域基金「笹川日中友好基金」で運営された「中国人気プロガー招へいプロジェクト」によって招へいされた、22名の中国人プロガーが、実際に見て感じた「ありのままの日本」について発信した文章をまとめたものである。彼らは日本で何をみて、何を思ったのか。

THE YOMIURI SHIMBUN

# 読賣新聞

2017年6月25日

.....記者が選ぶ.....

本よみかみ堂

## ジイちゃん、朝はまだ？

いわせかずみ著

438gの超低出生体重児として生まれた誉之介君。呼吸困難で産声もなく、未熟児網膜症という目の病気も併発していた。

このノンフィクションは、知的・肉体的なハンデもある誉之介君の障害、通院・入院生活、家族の協力などが、とぼけた筆致で描かれる。そして、少しずつでも確実に成長している様

子を、周囲が温かな目で見守っているのがよく伝わってくる。だから、湿っぽさはほとんど感じられない。

とはいえ冷静に考えれば、手術や入院を何度も余儀なくされる本人のつらさに加え、遠隔地療養・通院への付き添い、一風変わった誉之介君の行動への対応など、家族の苦勞も人並み外れているだろう。だから予想外の結末にも、さびしさの一方で、誰が悪いとは言えないと感じた。(日本橋報社、1800円) (佑)



中日新聞 2017年4月13日

十四億人を  
華人民共和国  
と農村の格差  
ず、環境汚染

激

みんなの本

---

---